

一ヶ月以上続く慢性下痢の一症例

初期研修医 1年 岸本 智志

症例 ●歳 女性

【主訴】全身の脱力・両足のしびれ

【現病歴】

X-2週間ほど前から倦怠感があった。

X-1週間前から、全身の力が入らなくなり同時に両足のしびれが出現し、起き上がることが出来なくなった。1日、5～6回の下痢がX-1ヶ月程前から続いており、起き上がれなくなっからは、ご飯もほとんど食べずに生活していた。1週間経っても症状が改善しなかった。

X日、自身の通報にて当院救急搬送となった。

血液検査の結果、カリウム ■■■■ mEq/Lと低値を認めており、治療と原因検索のため当院当科入院となった。

【既往歴】

脳動脈瘤(●歳時) クリッピングの手術

栄養失調・脱水症(●歳時)

右大腿骨転子部骨折・右上腕骨近位端骨折 (●歳時)

【併存症】

高血圧・大球性貧血・アルコール性肝障害

【家族歴】 父:大動脈瘤 母:くも膜下出血

【嗜好歴】

酒:約■■■ml/日(ハイボール)

喫煙:約■■■本/日(●歳から毎日)

【アレルギー歴】

食物:なし 薬:なし 花粉症:なし

【内服歴】 なし

来院時現症

意識 JCS ■■■ 体温 ■■■ °C 血圧 ■■■ / ■■■ mmHg 心拍数 ■■■ 回/min

SPO2 ■■■ %(room air) 呼吸数: ■■■ 回

身長 ■■■ cm 体重 ■■■ kg

眼瞼結膜: 蒼白あり、出血斑なし 眼球結膜: 黄染なし

頸部: リンパ節腫大なし、心音: 整、心雑音なし

呼吸音: 清、ラ音聴取せず

腹部: 平坦、軟

四肢: 発疹・浮腫なし

大関節: 腫脹なし

手指の関節: 腫脹なし

皮膚: 皮疹なし

下肢MMT: ■■■ / ■■■ (両側)

鑑別疾患

- 潰瘍性大腸炎
- クローン病
- 感染性腸炎
- 腸結核
- 甲状腺機能亢進症
- 偽膜性腸炎
- 過敏性腸症候群

入院時血液検査所見

生化学

TP	■ g/dl
Alb	■ g/dl
T-Bil	■ mg/dl
AST	■ IU/l
ALT	■ IU/l
LD	■ IU/l
ALP	■ IU/l
γ-GT	■ IU/l
AMY	■ IU/l
T-cho	■ mg/dl
Na	■ mEq/l
K	■ mEq/l
Cl	■ mEq/l

生化学

BUN	■ mg/dl
UA	■ mg/dl
CRE	■ mg/dl
Mg	■ mg/dl
GLU	■ mg/dl
HbA1c	■ %
CRP	■ mg/dl
CK	■ IU/l
凝固系	
PT	■ sec
PT-INR	■
APTT	■ sec

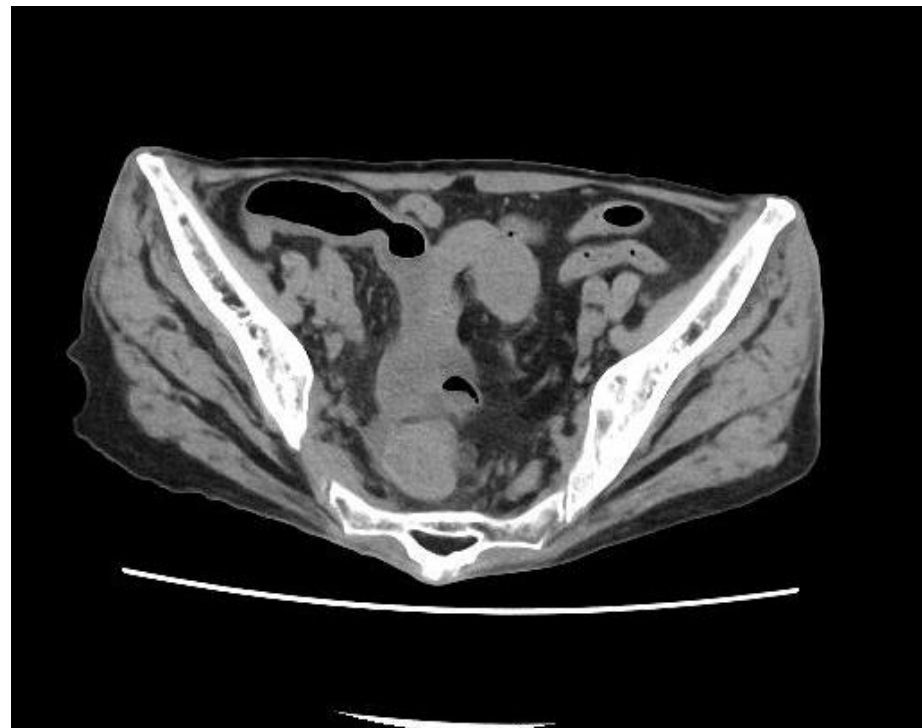
末梢血

WBC	■ × ■ /μl
Seg	■ %
Lymph	■ %
Mono	■ %
Eos	■ %
Baso	■ %
RBC	■ × ■ /μl
HGB	■ g/dl
HCT	■ %
MCV	■ fl
MCH	■ pg
MCHC	■ g/dl
PLT	■ × ■ /μl

尿所見

Na	■ mmol/L
K	■ mmol/L
Cl	■ mmol/L

入院時単純CT検査

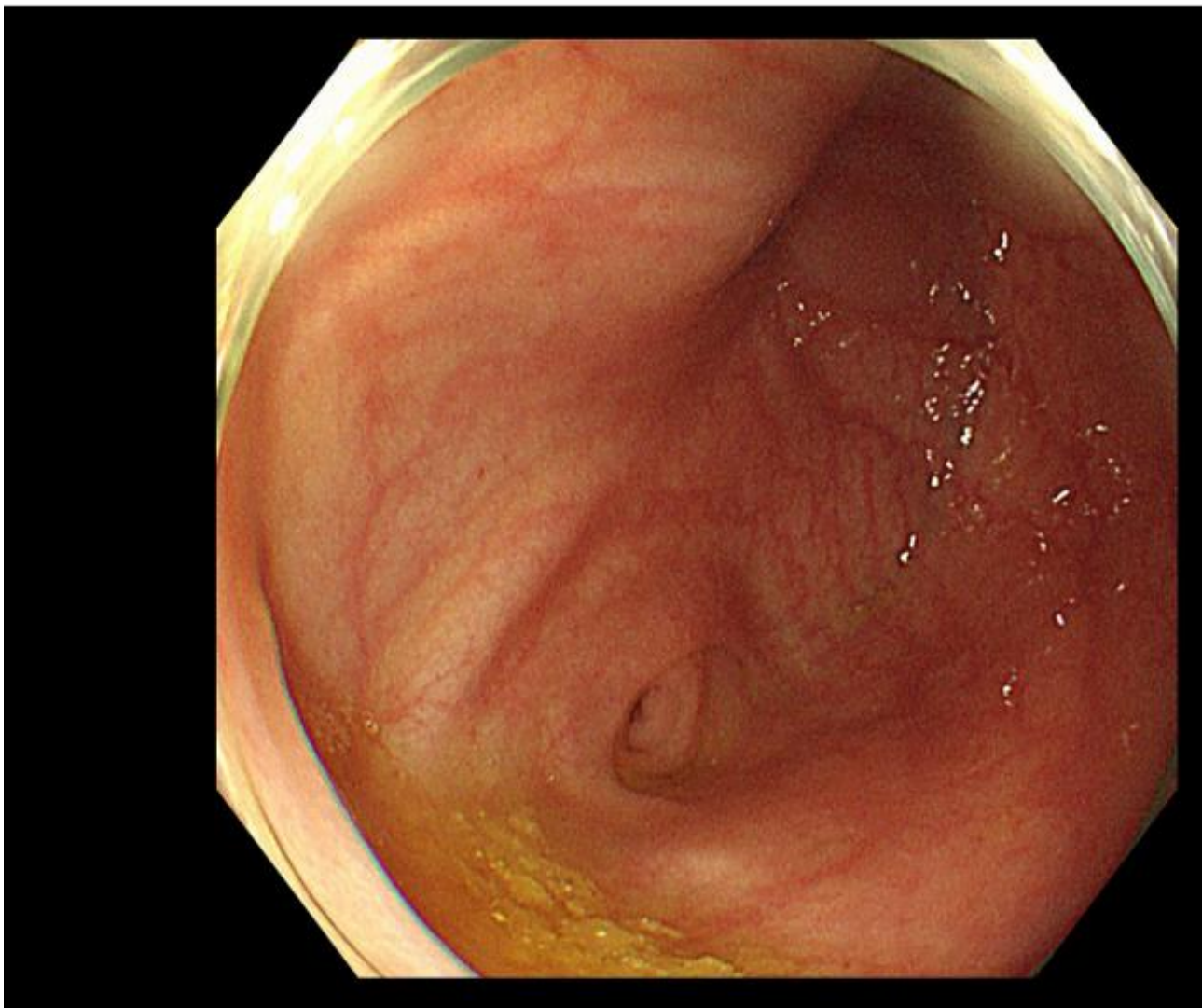


S状結腸の壁の腫脹を認める。

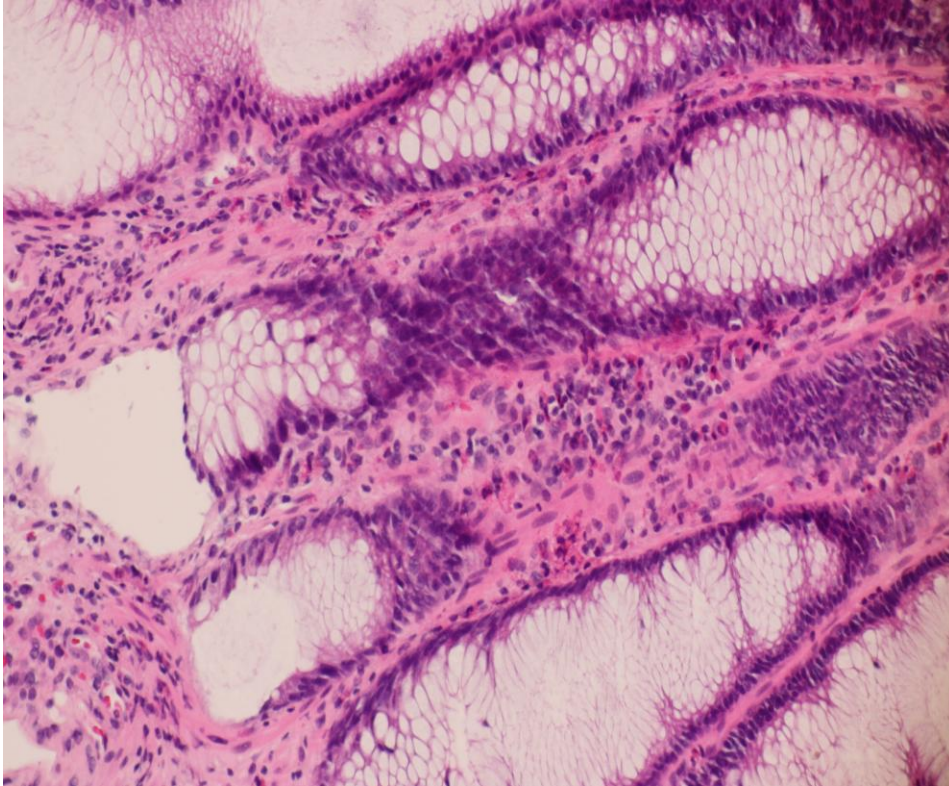
臨床経過

- 第一病日 K: ■■■ mEq/L、Mg: ■■■ mEq/L と低値認め入院。
ソルデム3Aと硫酸Mgで補正開始。四肢の脱力感あり。
- 第二病日 K: ■■■ mEq/L と低値継続しており、
アスパラK も追加し経過観察。下痢は継続している。
- 第三病日 K: ■■■ mEq/L、Mg: ■■■ mEq/L よりKは補正継続、
Mgは補正終了。
- 第七病日 K: ■■■ mEq/L と上昇認め補正終了。
四肢の脱力感なし。下痢は継続。
- 第十三病日 下痢の原因精査目的に大腸内視鏡検査施行。

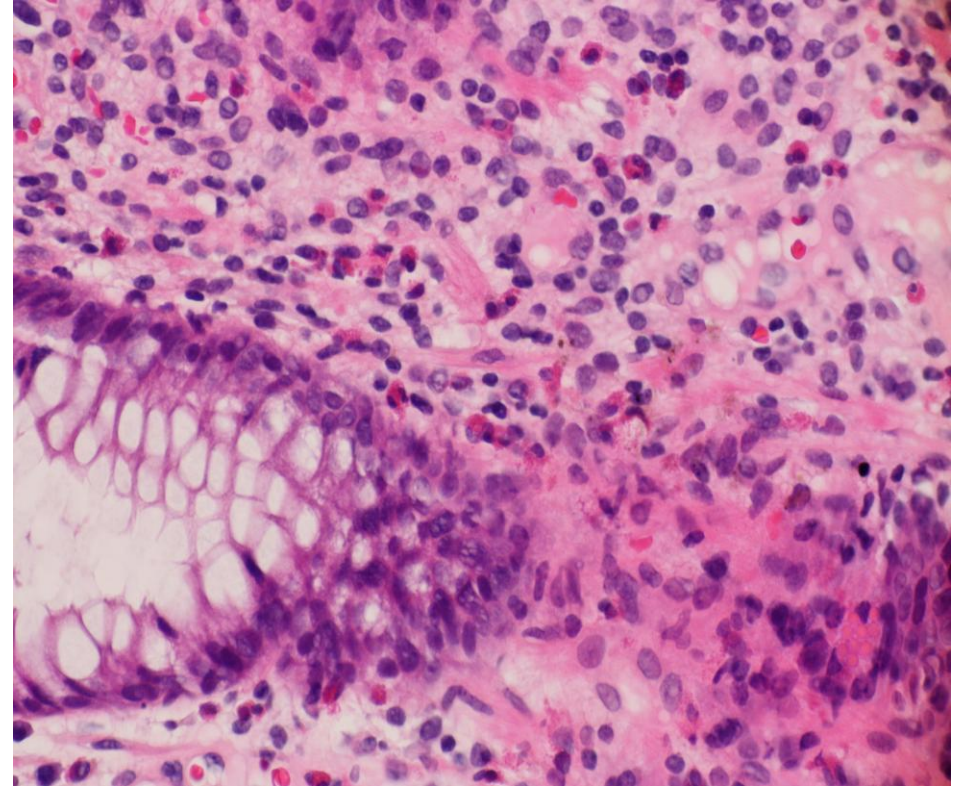
下部内視鏡検査所見



組織診



100倍視野



400倍視野

好酸球浸潤を認める。

臨床経過（続き）

第十七病日 下部内視鏡検査の組織診の結果、
好酸球性腸炎と診断。

第二十病日 好酸球性腸炎の治療目的に
●●病院に紹介。退院。

好酸球性胃腸炎について

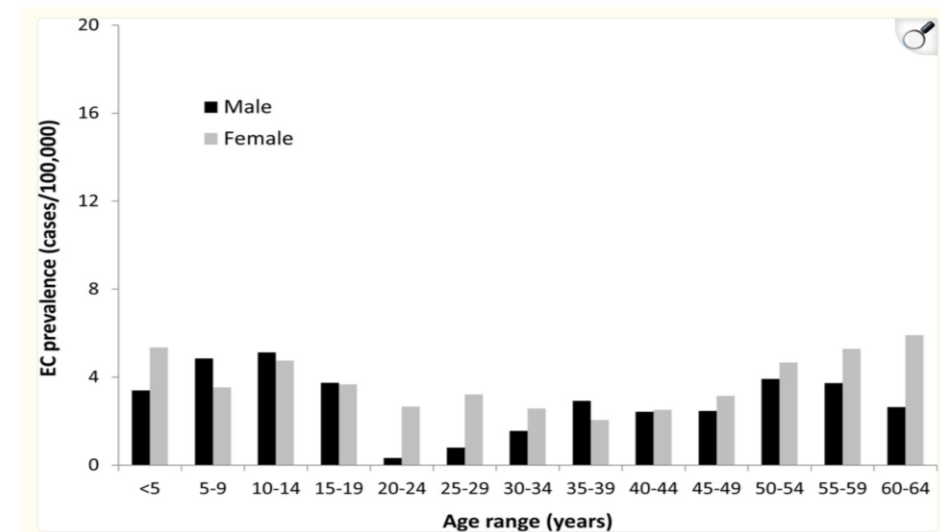
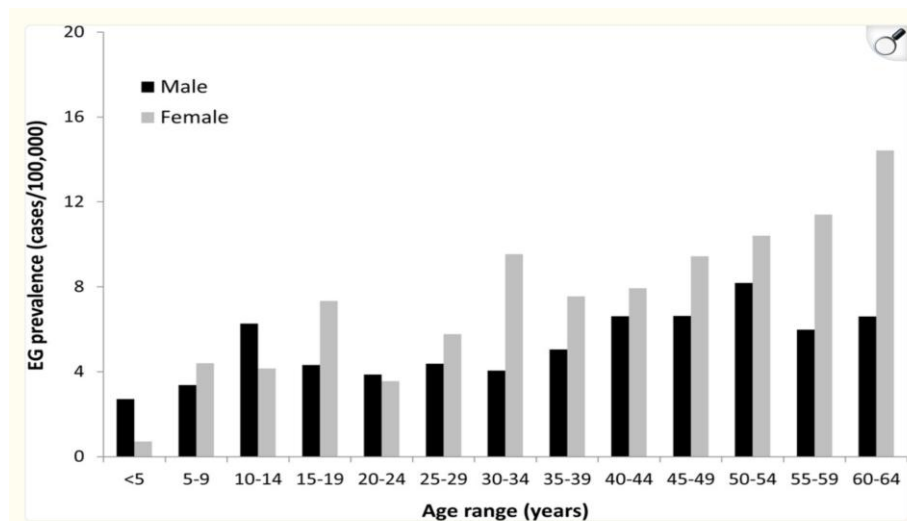
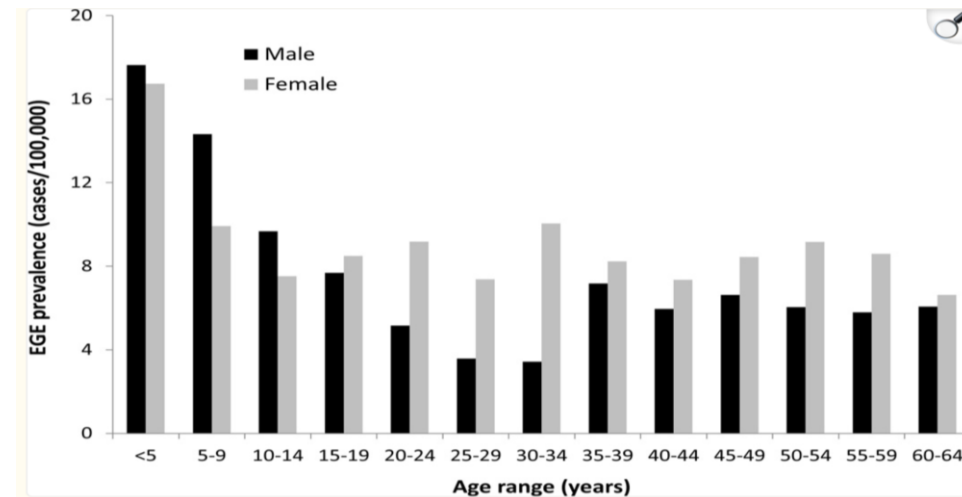
- 消化管壁への好酸球浸潤を特徴とする原因不明の稀な疾患である。
- 病変は胃・十二指腸・小腸などに好発。食道や大腸に認める場合もある。
- 小児期から高齢者まであらゆる年齢層に生じるが、20歳代～50歳代の年齢に好発する。
- 画像所見は多彩であり特徴のある所見に乏しい。
- 約半数にてアレルギー疾患を有する。

(参考資料:今日の臨床サポート)

Prevalence of eosinophilic gastritis, gastroenteritis, and colitis: Estimates from a national administrative database

[Elizabeth T Jensen](#)
[Christopher F Martin](#)
[Michael D Kappelman](#)
[Evan S Dellon](#)

- ・好酸球性胃炎では、女性に関して有病率は年齢とともに増加し、最年長の年齢層で有病率がピークに達している。(60～64歳の女性で14.4例/10万)。
- ・好酸球性胃腸炎の有病率は年齢とともに徐々に減少し、5歳未満の患者で男性と女性の両方で有病率が最も高く、それぞれ17.6例/10万と16.7例/10万であった。
- ・好酸球性大腸炎の有病率は、年齢と性別によってほとんど違いがなかった。



結 語

慢性下痢の原因として好酸球性大腸炎も考慮しなければならないと肝に銘じた。